

「徒然草」覚書 伊藤康圓

——言語作品における無償性について——

言語行動は、もともと何かの必要があって、他人に何かを語るものである以上、無意識に言う独り言や寝言でもない限り、人が他人に何かを語るのは、その相手にそれを語る「必要」があると思つてゐるからです。たとえ自己満足にしか過ぎないものでも、彼が他人にそれを語るのには、それによつてその「必要」（自己満足）が満たされるからですが、そのためには、それにふさわしい相手を相手に選ばなければなりません。他人に読ませることを全く意図しないで書く日記のようなものでも、少くとも自己を読者として予想してゐるので、この場合も、筆者としての自己が、読者として予想した自己にそれを読ませる「必要」を意識するか、または、後者が読む「必要」を感じることを前者が予想するから、彼はそれを書くのです。

不特定多数の読者を予想して文章を書く場合、筆者の懐く「必要性」の意識は、まず読者のそれとして意識されます。読者がそれを

何らかの意味で「必要」とすることが筆者に予想されない限り、彼にはそれを書く「必要」がないのです。（不特定多数の読者といつても、筆者の目指す読者層が彼の意図やその文章の内容によつて異なることはいふまでもありません。）したがつて、何を書くにしても、これから書こうとするものが、何らかの意味で彼の目指す読者の興味や関心の対象になる可能性を、筆者が予想しない限り、彼はそれを書く気にもなれない筈です。文学作品もこの例外ではありません。

ところで随筆や日記の場合、筆者が不特定の読者を予想しながら書いていて、その内容に何ひとつ読者の関心や興味を惹きそうなるのを認めることができません。しかも、それを書かすにはいられない或る無償の衝動だけが彼の筆を導いてゐることに気付いたとすれば、どういふことになるか。「徒然草」には、「（そして、「枕草子」にも）そういう困惑に直面した精神の希有な表現が見られます。

「徒然草」では、それは、「折節の移りかはるこそ、ものごと悲哀なれ」という書き出して春から冬にかけて季節の風物を描く途中、「また野分の朝こそをかしけれ」という言葉の直後、次のように、いかにも唐突にあらわれます。

「言ひつゞくれば、みな源氏物語、枕草子などにことふりにたれど、同じ事、また、今さらには言はじともあらず。おぼしき事言はぬは腹ふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ、あじなきすさびにて、かつ破りすつべきものなれば、人の見るべきにもあらず。」（十

九段「日本古典文学大系」による）
少々有名になり過ぎた言葉ですが、ここで兼好は、まず、自分の書いてゐることが書く必要のないことであるのに気がきます。と同時に、その書く必要のないことを書かすにいられない或名付け難い殆ど生理的な衝動を感じて、その無償性に自己を賭ける決意をします。「同じ事、また、今さらに言はじともあらず」とは、その決意の表明であり、「おぼしき事言はぬは腹ふくるゝわざ」とは、その衝動の生理的感覚の卒直な表現でした。書く必要のないことに気付く目は、彼の中の他人の目で、いわば彼の批評精神ですが、その

目に不必要と見たものが、読者の目に「必要」と映る筈はない。だから、これは、訳の分からぬ思いに駆られ、「筆にまかせ」て書く「あじきなきすさび」なので、「人の見るべき」ものではない、と彼は断ずるのである。彼は自己の中の「他人の目」と「無償の衝動」との矛盾に気付いたとき、後者に従うことを決意しますが、そのためには、この矛盾を解決して、前者を納得させなければなりません。右に引用した個所は、そのための思考が述べられているのです。そして、この目的は一応達せられたように見えます。しかし、前者は後者に途を譲り、彼は衝動の赴くままに、存分に筆を走らせているように思われます。

しかし、単に「自己の中の他人の目」を納得させるためだけならば、黙考して足りるわけです、その思考を本文中に、少なくともあゝいう形で書き込む必要はない筈です。彼がそれを敢えてしたのは、彼が本当に納得させる必要があったのは、実は本物の他人の目であったからであり、彼の文章の無償の存在理由（必要性）を讀者に納得させるためであったと思われまゝ。「彼の中の他人の目」と無償の衝動との矛盾は、たしかに言葉の上では、

「人の見るべきにもあらず」という形で、一応解決されましたが、そのために、今度は、彼の言葉と行為（他人に読ませる意図で文章を書くという行為）との間に矛盾がおこるのです。他人に読ませたいという願望が「人の見るべきにもあらず」という彼の言葉に背反したのです。しかし、この「願望」と「無償の衝動」とは、結局同じものです。もと／＼他人に読ませることを自明のこととして書いてきた文章だからこそ、それが書く必要のないものであることに気付いた時、「人の読むべきにもあらず」と判断したので、この場合は、「書く」と「人に読ませる」とことは同じことだからです。また、この彼の言葉が彼の中の「他人の目」と一致することは、すでに述べたことからも明らかです。とすれば、上記の「彼の言葉と行為との矛盾」は、実は、彼が解決したつもり「彼の中の他人の目」と無償の衝動との矛盾」と同じ性質のものであったことがわかります。たゞ一つ違ふ点は、前者が、作者の精神の力技によって、彼の中の「他人の目」を納得させるのに必要な程度には解決されたのに対して、後者は作者の目を逃れて、未解決のまま放置されていることです。しかし、「徒然草」を読む者

が、この個所まで読み進んで来て、上記の言葉に共感を覚えた時、これまで付合ってきた取り留めのない叙述が、或無償の感動を伴って彼の心に蘇ってくるかも知れません。作者の解決し得なかつた「矛盾」が本当に氷解するのはこの時点においてであり、この「筆にまかせ」て書いた「あじきなきすさび」に文学としての魅力を読みとるのも、こうした心の働き以外にはないのです。

作者が「人の見るべきにもあらず」とはまきり意識したのは、直接にはあの段だけだ。たかも知れません。しかし「心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書き」つけてゆく自己の方法に気付いていた作者の目に、その作品自体が「よしなし事」に映らなかつた筈はないので、彼は「徒然草」の執筆中、到る所で上記の矛盾に悩まされたと思われまゝす。尤も、同じ彼の目に、人生そのものが「よしなし事」に見えていたとしたら、そして、その人生に執着する自己の姿に、より大きな矛盾を感じていたとしたら、作品上の矛盾などは取るに足らぬものと思われたかも知れません。こうした二重の矛盾に堪えながら生きる自己の姿が、彼には「あやし」く「もぐるほし」く見えたのです。